

# 會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第 卷八十第

行發日一月四年三十正大

故戸田海市博士肖像并に哀詞

論叢

虞夏書に見たる政治經濟思想……………法學博士 田島 錦治  
 階級の動學的考察……………文學博士 高田 保馬  
 獨逸最近の社會學論……………文學博士 米田庄太郎  
 植民地の經濟政策に就きて……………法學博士 山本美越乃

時論

不景氣と租稅……………法學博士 神戸 正雄

說苑

一子相續制度に就いて……………經濟學士 八木芳之助  
 客觀的勞賃論の史的發展……………經濟學士 森 耕二郎

雜錄

戸田博士逝く ○戸田海市君の追懷(西田瀧太郎) ○戸田博士を憶ひて(福田徳三) ○戸田君の追懷(神戸正雄) ○追憶の斷片(河上藤) ○戸田博士と私(河田嗣郎) ○戸田先生を憶ふ(小島昌太郎) ○戸田博士と大阪市勞働調査事業(關 二)

## 戸田海市君の追懷

西田幾多郎

私が戸田君を知つたのは、明治の三十二三年の頃であつたであらう。私が山口から二度目に金澤の高等學校に行つた時、君も同時に東京から赴任せられたと記憶する。私と君とは教官室でテールが向い合つてゐたので、互に能く話し合つた。當時の戸田君は無論若くもあり、元氣でもあつたが、近時の戸田君とあまり變つては居なかつた。意志の強い、議論の鋭い、中々

に負け嫌な男であつた。一つの考を立てると、それを何處までも考へ貫き、あらゆる手段を用ゐて、議論を集中して行くといふ風であつた。當時、私は君から直接に聞いたと記憶して居るが、君は青年時代には可なり苦學したさうである。牛乳配達などもやつたさうである。而して其時はミルの經濟學しか有つて居なかつたので、この一冊の書を幾度となく讀み返し讀み返し、之について考へに考へぬいたと云つて居た。君の天命の然らしむる所でもあつたであらうが、右の如き境遇と修養とが君の如き人物を築き上げたのかも知れない。

戸田君はあまり多く書物を讀まない人であつた。併しその代りよく考の立つ人であり、よく考の纏まる人であり、而して何處までも徹底的に考へ通す人であつた。私には彼の考は多少抽象的にして一面に偏すると思はれる節がないでもなかつた。併しそれだけ彼の議論は徹底的でありよく纏つてゐた。彼の考には直覺的洞察に富むといふ様な所は少なかつた。併しそれだけ

彼の議論は一步々考へられたものであり、證明せられたものであつた。君は嘗て自分は實行家には適せないと云つて居つたが、實行家に對して適切なる論策を呈する君自身は實行家なかつたも知れない。

君が須磨に移られてより以來、この二三年は君と話す機會はなかつたが、君の晩年は深く思を我國の國策に致された様である、事ある毎に當路に建言などとしたさうである、「いづれ自分は長く生き得る身にもあらねば」などと云つて居た。私には君の學問上のことは分らないが、我國の現今の社會狀態から見ても、君の如き眞摯に深く考へる國土的な學者を失つたことは國家の損失であると思ふ。

私は君と専門を異にして居たから、同一大學に居るといふものゝ、近來左程親しく往來して居た譯でもない。併し兎に角、長い間の友達であつたと云ひ得る。君は強い意志の人たると共に親切な情の人でもあつた。數年前、私の家に不幸の重なつた時など、君は病を犯して尋ね來

り、心から私を慰めた。今私は君が病軀を以て學の爲め國の爲め一日も意安んじなかつた雄々しき志を思ふ時、自ら涙ぐまざるを得ない。併し君は立派に覺悟して居た筈である、潔くその死を迎へたことであらう。

友として君を懷ふ時、思は自ら共に若かりし第四時代の昔に還らざるを得ない。當時君は尙三十前後の頃であつた。何事も一理窟あつて、系統的にやらねば氣のすまない君は、その頃健康のためと云ふので、規則正しい散歩と弓の稽古をやつて居た。而して羽虫の癖に相撲がすきであつた。無論自分で取るのではない、見るのである、否見るといふよりも新聞で讀むのである。そして能く相撲の手といふものを知つて居た。手の説明でも聞くと、すぐ私などは説明のモデルに用ゐられたものであつた。